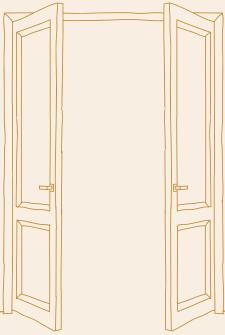


私のネクストステージ

—退職者への質問状—

Vol.61



20歳から続けてきた 三線の腕前を生かし、 定年退職後に教室をオープン

元沖縄県職員

与那嶺 直樹さん (64歳) 2021年退職

【よなみね・なおき】1961年、沖縄県今帰仁村出身。沖縄県教育庁総務課（公立学校共済組合）を定年退職後、実家に戻ったことを機に、三線教室をオープン。三線は「琉球古典音楽 野村流音楽協会」で40年以上学び、現在、教師免許も務める。

——与那嶺さんは沖縄県庁に勤務されていた
40歳頃から「定年退職後は三線教室を開いても、面白いかも知れないな」という気持ちがありました。定年が目前に迫つてくると、その希望は具体的になり、

——与那嶺さんは沖縄県庁に勤務されていた
40歳頃から「定年退職後は三線教室を開いても、面白いかも知れないな」という気持ちがありました。定年が目前に迫つてくると、その希望は具体的になり、「母校の小学校で働きながら、ボランティアで三線を教える」というようになりました。

——「三線」とはどのような楽器ですか。
三線は今から55年以上前、琉球王朝時代に中国の弦楽器を改良して作られ、宮廷楽器として使われてきました。胴にニシキ蛇の皮を張っているのが特徴です。

——与那嶺さんが三線を始めたきっかけは?
中学1年のとき、母校の小学校に顔を出すと、三線クラブの先生に手招きされまして、案内された教室で初めて三線を弾きました。自分で音を出せたときの感動が忘れられず、その後も自己流で弾いていましたが、20歳のとき、職場の先輩に「琉球古典音楽 野村流音楽協会」の先生を紹介してもらいました。そこから古典音楽、舞踊曲、民謡曲などを習うようになり、結局、60になるまで40年間指導を受けましたね。

職場でも三線好きが集まつて三線愛好会をつくり、同僚たちと弾いていました。
——三線教室を始めるまでには、どのような経緯があつたのですか。

職場でも三線好きが集まつて三線愛好会をつくり、同僚たちと弾いていました。
——三線教室を始めるまでには、どのような経緯があつたのですか。

40歳頃から「定年退職後は三線教室を開いても、面白いかも知れないな」という気持ちがありました。定年が目前に迫つてくると、その希望は具体的になり、「母校の小学校で働きながら、ボランティアで三線を教える」というようになりました。

——三線教室を始めるにあたり、どのような準備をされたのでしょうか。
当初は公民館を借りて教室を開く予定だったのですが、2021年当時、新型コロナの感染拡大防止のため、村役場からの使用許可が下りませんでした。

私の実家もありましたが、高齢の母が兄と同居するため引っ越した後、既に借り主も決まっていたので、どうしようかと。イチかバチかの思いで借り主の方に「ここで三線教室を始めたいのですが……」と伝えたところ、快く承諾してもらうことができ、実家で教室を開くことにしました。

実家は築60年の古民家です。家の周りには草が生い茂っていたため草刈りをしなければならなかつたですし、室内も掃除が必要でしたが、私が三線教室を開くことを歓迎する友人・知人が手伝つてくれたおかげで、わずか1週間にして三線教室の開設にこぎつけました。

指導にあたつては、三線指導の教師免許を取得していましてし、所属していた「琉球古典音楽 野村流音楽協会」に三線教室を始める報告を報告するだけで届出は完了しました。



子どもたちが個人で出場するコンクールでは受賞者も多く輩出している



琉球王国の伝統衣装を着て舞台に上ることも



観光客に向けて三線・指笛の体験者を募集する横断幕を作成



築60年以上の実家で開いている三線教室の様子。「子どもたちに教えていると、元気がもらえますよ！」

——それで2021年10月、無事に三線教室の初日を迎えたのですね。

そうですね。初日にもかかわらず子どもと大人を合わせ20名程が集まりました。

現在は小中・高校生の「子ども会」が39名、20代～60代の「大人会」が24名、合わせて60名以上の生徒を教えています。

子ども会の稽古は平日の放課後と土曜日の14時～18時にそれぞれ1時間行っています。大人会の稽古は週2回、月8回のグループ稽古を基本としています。古典曲から舞踊曲、民謡曲までを本格的に指導し、コンクール前になるとマンツーマンでの稽古も行います。

また、観光客を対象に、三線と指笛の体験教室も開いています。体験教室は村のふるさと納税の返礼品にもなっていて、全国各地から沖縄を訪れるお客様に楽しんでいただいています。

——収入面はいかがですか。

残念ながら、収入面ではまだ仕事として成り立っていないません。ボランティアの側面が強いですが、自分が好きなこと、得意なことを皆さんに教えているわけですから、毎日が楽しく充実していて、やりがいがあります。地域の方々にも喜ばれ感謝されているのが伝わってきます。

——ご実家で開催されている三線教室以外で、何か活動はされているのですか。

母校の小学校で週1回、子どもたちの

教室の掃除を手伝つたり一緒に遊んだりしながら、月2回、三線クラブの指導をしています。その他、老人ホームを慰問して三線の音色を届けることもあります。

——三線を教える上で、こだわっていることは何ですか。

三線の楽しさ、面白さを感じてもらう、知つてもらうということを一番大事にしています。それに加えて、子どもたちへは「挨拶がちゃんと出来る子にする」「宿題などもちゃんと出来る子にする」ことを心掛けています。個性的な子どもも多く、集中させるのに苦慮していますが、子どもたちの成長は目に見えてよくわかります。

三線には、歌いながら三線を弾く「唄三線」というジャンルがありますが、子どもたちの唄三線は周りの大人を元気にしてくれますよ。

——最後に、読者に向けてメッセージをお願いします。

趣味ややりたいと思うことがあれば、早めにスタートしたほうが良いと思います。私の三線教室のモットーは、「すべての人・物に感謝する」です。毎日感謝の気持ちをもつて楽しく頑張つてきましたが、最近は感謝される側になつている場面が多くなつたように感じています。自分が健康である間、ずっと続けたいと思つて